

発行：八戸市立市川中学校地域学校連携協議会

校長：馬渡教二 会長：小向龍悦

## 青森県重宝指定の「市川日記」①

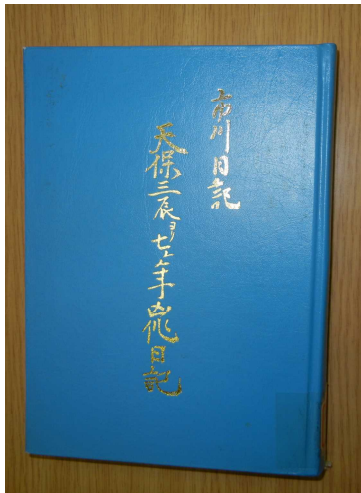
### 〈天保三辰ヨリ七ヶ年凶作日記〉

著者は 向谷地在住の 佐々木太郎左衛門

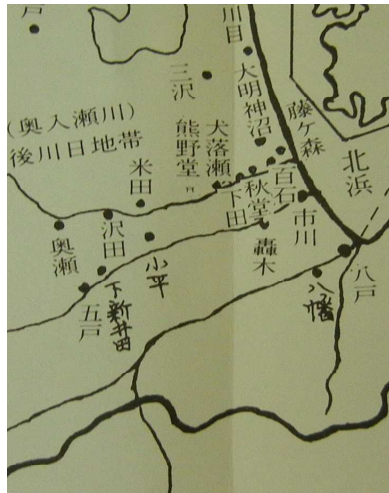
江戸時代には、元禄・宝暦・天明・天保等の飢饉があり、特に天保の飢饉について、当時市川村の向谷地に住んでいた佐々木太郎左衛門が「市川日記 天保三辰ヨリ七ヶ年凶作日記」として書き残しています。

この日記は、「借考 往古近來人姓至終時而 無不遭者…」という約六百文字の漢文で書かれた「序文」(写真右端参照)で始まる天保三年(1832年)から7年間の凶作の様子を記録したものです。

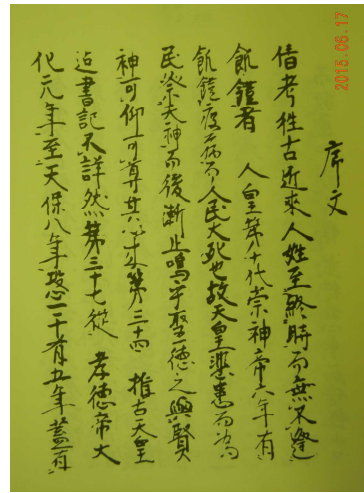
内容は、毎年の気象状況・収穫量・食料欠乏等に関し主として市川地方の当時の凄惨な状況を克明に記し、今後の大飢饉に備える心得について子孫のために伝えたものです。



〈表紙〉



〈市川付近の地図〉



〈序文〉

天保九年(1838年)には馬鈴薯の栽培を試みており、これが救荒(飢饉の際に救助)作物として有効であることを村人に勧めており、農業書としても注目されています。

後年、佐々木太郎左衛門の子孫である向谷地又三郎(元むつ工業校長)・向谷地芳久親子が原文に解説を加えた図面・写真を含む約360ページを越える典籍を発行(写真左端)し、その原典である「市川日記 天保三辰ヨリ七ヶ年凶作日記」が、平成8年(1996年)5月22日に青森県重宝(重要な宝物)として指定されました。(以下、次号)

八戸市立市川中学校地域学校連携協議会教育コーディネーター：木村 隆一

参考資料：「八戸市史近世資料編Ⅲ」 盛田稔 解説「市川日記」  
奈良孝次郎「市川日記から見たじゃがいもの効用」

